

地域協働学校だより No.4

令和元年 10 月 29 日
新宿区立市谷小学校
地域協働学校運営協議会

「地域協働学校運営協議会」からのご報告です。10 月 19 日に道德地区公開講座として、法務省矯正支援官で落語家の桂才賀さんの講演会が行われましたので、内容をご紹介します。

子供を叱れない大人たち～少年院の子供たちから親・教師へのメッセージ～

トクメンの落語家

篤志面接委員（略してトクメン）は刑務所や少年院へ行き罪を犯した成人や少年とカウンセリングを行う人のことです。篤志とあるとおり、桂才賀さんは全国の少年院への訪問をすべて自費で行うボランティアです。少年院や刑務所には、このようなカウンセラーが各 15,6 人程ずついます。普通は、お坊さん・神主さん・神父さんなどの様々な宗教の聖職者が、教誨師（きょうかいし）として、このような更生施設でボランティアという形でカウンセリングをするのですが、落語家である桂才賀さんがなぜこの活動を始められたのでしょうか。

「落語の起源はお坊さんの説法です。説法を、聞いている人が退屈しないように面白いお話を入れ、最後には＜仏の教え＞を伝える形式から、面白い部分を発展させ、子供にも分かりやすくしたのが落語。ですからその話には楽しませながらも必ず何らかの教訓や戒めが入っているのです。」だから今でも落語家は「高座（和尚さんの座るところ）」で話をするのですね。

講演のなかで「償^{つぐな}い」（作詞・作曲 さだまさし）という歌を聞きました。歌詞は実話に基づいています。優しくまじめな「ゆうちゃん」が過失から交通事故の加害者になってしまい、刑務所から出所した後は被害者遺族に送金を続けます。7 年目に被害者家族から「許し」の手紙を受け取るのですが、「ゆうちゃん」はその後送金を続け、一生かけて罪を償おうとするという内容です。才賀さんは、少年院の少年たちと「償う」とは、どういうことかについて話しておられるそうです。それは犯罪者が少年院や刑務所に入っている期間のこと？いいえ、それを終えて社会に出てからが償いだよと。

子供の非行は親のせい

かつて小田原少年院が配布した「子供を非行化させるコツ～実態からみたベスト 10」についての話になりました。もちろん逆説的な注意喚起なのですが、親の放任、子供の人格を否定、夫婦の不仲、団らんの無い家庭…など、10 か条のすべてが親の子供に対する接し方に関わる内容でした。講演後にお話を伺いましたが、そもそも少年院に入る子は裁判所が、「この家庭では更生できない」と判断するケースであり、親も「やっかいばらい」とばかりに気に留めない気の毒な家庭が多いそうです。



プロフィール

法務省矯正支援官/落語家/中央大学落語研究会指導役/日本自動車連盟公認審判員（国内 A 級ライセンス）/防衛省自衛隊統幕学校常任講師統幕芸激隊（ボランティア慰問部隊）隊長。

海上自衛隊を経て、1972 年に九代目桂文治に入門。1980 年から日本テレビ「笑点」若手大喜利出演、1985 年には真打に昇進、七代目桂才賀を襲名する。現在は、高座、テレビ、ラジオで活躍する傍ら、少年院篤志面接委員として全国の少年院を訪問。青少年と本音のつき合いを深めている。著書：「子供を叱れない大人たちへ～少年院の子供たちから親・教師へのメッセージ」「もう一度、子供を叱れない大人たちへ～少年院慰問 1000 回を超える落語家から親・教師へのメッセージ～」（実務教育出版）ほか。

たまにはよ 叱ってみろよ 大人たち

これは以前、栃木県で中学生から親や教師に向けた気持ちを書いた川柳を募集したところ、トップに選ばれた川柳です。桂才賀さんは、ほとんどの大人は「叱って」いるつもりで「怒って」いるのだと言います。「怒る」は感情主導で攻撃的、知力や教養も不要なので小さな子供でもできます。一方「叱る」は冷静に教諭することで、叱られた側も愛情を感じられる行為です。少年院の子供たちも「叱られる」ではなく「怒られる」ばかりだったと言うそうです。子供たちはその違いをよく分かっています。私たちは普段子供を「叱って」いるでしょうか。

パネルディスカッション



後半は桂才賀さんに泉崎校長先生、本橋 PTA 会長、小島地域協働学校運営協議会代表を交えてのパネルディスカッションで、さらに興味深いお話を伺うことができました。「叱る」を実行するにはまずは一拍おいて冷静さを作ること、でも気持ちが萎えるほど間をあけずに間合いが大切、感情的

にならず、相手に自分の気持ちを伝えることと、桂さんに実演も交えて教えていただきました。夫婦げんかは子供に見せるなというが、そんなことはない、子供の前で夫婦げんかをして、仲直りするところまで見せればよいのだ等、なるほどと思わせるお話もたくさんありました。親や大人が子供を叱ることだけでなく、職場（学校現場）で中堅の先輩が若手を叱ったりアドバイスしたりすることの難しさにも話が及びました。

躰（しつけ）の話題では、家に入る向きで脱いだ靴（入り船）を外向け（出船）に揃えることから始めるとよい、とアドバイスをいただきました。

口の達者な子供にうまく対応するには？という保護者からの質問には一言、「落語を聞かせなさい」。子供向けの落語もあるそうです。



<講演を聞いて>

さすが語りのプロだけに、聴衆をひきつけ、ときに笑いもあり、あっという間の時間でした。マニュアル的に指導されるのではなく、聞き手に考えさせる間合いをとった話し方も印象的でした。講演後にも少しお話をさせていただきました。子供はもともと親の関心が欲しくて悪いことをすることが多いので、子供のサインを待つのではなく、親から声をかけてあげ、気にかけていることを伝えるのがよいとおっしゃっていました。桂才賀さんが 40 年余りにわたって少年院に通ってきた経験から感じることは、昔の非行少年の方が、今よりも、親をかばう子が多かったそうです。

また、「最近面白いものを見せたり話を聞かせたりしても、学校でも少年院でも反応が薄く、薄ら笑い程度が多い。これも親の責任だと思う。」とのこと。自分が受け入れられているという安心感がないと、のびのびと自分の気持ちを表現することもできないのかもしれない。

ところでこの日は、講演会の前の休み時間に体育館のステージでパフォーマンススクラブの発表がありました。ステージ上の児童は隠ることなくのびのびと発表し、客席の児童たちも元気に反応していました。その姿を見て、市谷小の子供たちは自己肯定感が高く自分を表現できる子が多いのだなと、とてもうれしく思いました。

子育てのヒントいっぱいの講演会をありがとうございました！

